2017-9-23

源氏物語の名数（五十三）、源氏物語五十三帖説

 酒井雁高（浮世絵・酒井好古堂主人、元日本浮世絵博物館館長）[HP:ukiyo-e.co.jp]

源氏物語について、学生時代から、50数年間、名数（めいすう）を初めとして、不審な点を熟慮し、少しづつ訂正、発見した事柄を書き溜めたものを纏めてみた。

藤原道長（966-1027）

藤原公任（966-1041）

紫 式部（973c-1014c）

藤原定子（976-1000）

藤原彰子（988-1074）

藤原妍子（994-1027）

1. 源氏物語の名数（めいすう）は五十三、つまり五十三帖（巻名）

 \*源氏物語は、「五十三帖」である。 これは紫式部が、華厳経（入法界品）を初め、阿弥陀経、感無量壽経、大般涅槃経など、ブッダの生涯、前世（ジャータカ）など知ってからに違いない。 「五十余（よ）」帖の「余（よ）」の音韻の似ているため、「五十四（し）」と誤解されてきた。 \*若菜は量が多く、上下に分けて書かれているが、巻名は一つである。従って巻数は「五十三帖」ということになる。 紫式部は仏典（無量壽経など）から、善財童子が善知識を53カ所を尋ね、悟りを開いたという故事から、親子、母子（義理の母も含む）など、男女の確執はブッダによって救われると考えた。このため、最初から五十三帖に物語を設定して、40帖（光源氏）、繋ぎ3帖（源氏没後）、宇治10帖（薫）にしている。従って、光源氏没後の繋ぎ（匂宮、紅梅、竹河）も紫式部以外の人が書くことは有り得ない。

\*源氏物語は未完であると考える人は、この名数（五十三）および最終巻「夢の浮橋」の末尾を確認する必要がある。 ◇池田亀鑑／夢の浮橋／源氏物語／日本古典全書。朝日新聞社

（薫）すさまじく、なかなかなり、と、思すことさまざまにて、人の隠しすゑたるにやあらむ、と、わが御心の思ひ寄らぬ隈なく、 落し置き給へりしならひに、とぞ。本に侍るめる。

 \*青表紙本を底本に使っているが、他の本は「本に侍るめる」は無い。

（池田亀鑑の頭注）「もとの本にさう書いてある」の意。寫した人の註記で、鎌倉時代以後古形を示す意圖から屢々慣用された。 （池田亀鑑の頭注、附記）作中人物の運命に決定的な結末をつけないで筆を擱く。五十四帖の巨編を終へるに適はしい筆致といふべきか。

 （雁註）しかし、「...とぞ」で終る方が無理がない。紫式部が創作した以上「もとの本」などある訳がない。 この語句の有無で、私は青表紙本は混乱、河内本は紫式部の自筆本の意図を正確に伝えていると確信した。 ここで河内本の夢の浮橋（源氏物語の最終巻）の影印を御確認いただきたい。（略）

1. 紫式部の草稿本（自筆本）、推敲本、清書本

1005.12（寛弘2末）紫式部が中宮彰子に出仕した時期、この頃までに既に物語五十余帖は書き上げていた。 このため、その3年後、道長が草稿本を持ち出すことが出来た。未刊では、持ち出す意味がないであろう。 1008（寛弘5.11） 藤原道長は紫式部の局から、源氏物語の草稿本を持ち出し、書き換えた（推敲本） \*式部は「道長の妾」。「妾」ハ、女性が簪（かんざし）を付けている意、侍女の意であるが... 2.1　 草稿本、姸子 \*道長は、紫式部の草稿本を勝手に持ち出し、姸子へ。 2.2 推敲本、行方不明 \*道長は、草稿本を「よろしう書きかへた（書き換えた）りし本」（推敲本） 2.3 清書本、彰子、内裏   この清書本も未発見 \*道長は、清書本を彰子へ（内裏）。

 \*式部は1008寛弘5、35歳ほどであり、41歳ころ亡くなったと思われる。 1008（寛弘5）、この時点で、草稿本は全部（50余帖）、完成していたのだろう。 亡くなるまでの5-6年間で、源氏物語を完成させたと考えるより、完成していたと考える方が無理がない。 だから、道長は草稿本を密かに持ち出し、書き換えて（推敲本を作成）、清書本とした。 これら2.1、2.2、2.3、何れの本も発見されていない。 これらが発見されていれば、紫式部の源氏物語の当初の意図が明らかになるのだが。 \*草稿本、推敲本、清書本など術語は、微妙に分かり難いこともあるが、1988池田利夫／源氏物語の文献的研究を参照した。

3　菅原孝標女（1008-1059c）（たかすえのむすめ）、五十余帖を入手

1021（治安1）伯母から、源氏物語五十余\*（「よ」で「し」ではない）帖を貰い、読書に夢中になる。 菅原孝標女所蔵の源氏物語五十余\*帖　これも未発見　\*菅原孝標女は、更級日記の作者 1008（寛弘5）から13年後に五十余帖を入手していた。 1014c（長和3）、式部の没年（推定）から考えると、没年の6年前である。 （雁註）菅原孝標（たかすえ）女が所持していた孝標女本も発見されていない。しかし、諸要件を勘案すると、源氏物語は完結していなくてはならない。前後の状況から考えれば、1008（寛弘5）に全五十余帖は完成していたと考えるのは自然である。 だから、道長は、草稿本（姸子へ）を持ち出し、書き換え（推敲本）、清書本（彰子へ）とした。

4　和歌の意味、総数、和歌ハ精神的な苦しみ

（池田利夫）源氏物語の和歌総数は795である。和歌は、その人物の溜息、苦悩を現している。一番多いのは須磨48、賢木33、明石30...一番少ないのは夢の浮橋 1である。 （雁註）つまり、浮舟は尼削ぎをして、仏の道へ入った。従って、苦悩、確執が無くなったということであろう。和歌の数を詠嘆、苦悩、懊悩の表出と考えれば、最終巻の夢の浮橋で、仏に救われて、苦しみが消えていったということになる。だから苦しみの表出としての和歌は一つだけになっている。名数を含めて、ブッダにより救済されるという意味で、源氏物語は完結している。もっとも源氏物語に詳しい知人によると、源氏物語の和歌そのものは、単なる贈答歌であり、和泉式部のような和歌本来の感情の表出、息を呑むような和歌は少ない。紫式部日記を読めば分かるように、紫式部は、宮中の儀式、行事などの記録係りに相応しい作家であった。尤も若菜、宇治十帖は全帖が人間の心理を表出。

1988池田利夫／源氏物語の文献的研究

5　写本（定家） 藤原定家（1162-1241）

青表紙本の奥入（おくいり、奥書）、帖毎に複雑な転写、経緯がある。俊成・定家の流れ。

5.1  1190s　建久　証本が盗まれた　\*証本を盗んだ人物も写本に造詣の深い輩であろうか。未発見。

5.2  1224.11　小女らに書写させた　\*30年以上も証本が無かった。未発見

 5.3　藤原定家の自筆本（ 5帖）：「花散里」「行幸」「柏木」「早蕨」「野分」　（第一に重要） 自筆本奥入［青表紙本 証本］ 青表紙本4帖（定家）、これらの写本は、1224.11-1241の期間に転写された。 青表紙本（大島本）： 53帖（浮舟、欠く） （雁註）影印は、超高額で、一般の学徒、研究者に開放されていない。所蔵者は、各図書館、美術館、博物館が行っているように、一日も早くインターネットに公開し、誰でもが確認できるようにして貰いたい。それが学問を広く深めることに繋がる。定家自筆の5帖、そして明融の臨模8帖、これら13帖以外は信頼度が少なく、従って残り40帖は河内本の優先度が高い。

（雁註）最近では、これまで定家自筆本と称する鈔本も、自筆と認められず、異筆と考えられている。一体、どれが定家自筆なのか。

5.4　宮内庁書陵部　\*青表紙本以外の諸本を含むため、現在使われない

（翻刻1）1969-山岸徳平／源氏物語　全5／日本古典文学大系。岩波書店

 \*影印を見る限り、荒っぽい筆耕による転写で気品が感じられない。

（翻刻2）1984-阿部秋生、秋山虔、今井源衛／完訳日本の古典　源氏物語、全10。小学館

 （翻刻3）1993-1997柳井茂、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎／源氏物語　5索1／新日本古典文学大系、岩波書店

（翻刻4）1994-阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男／源氏物語　全6／新編日本古典文学全集。小学館 　\*底本とした活字本、「原文・注・現代語訳」同一ページに、3段組で配置

 \*（翻刻4）が原文テキストとして最善。残念ながら、私は未だ入手していない。 \*御存知のように、源氏物語は多くの異文（いぶん）がある。紫式部の自筆本（「草稿本」、「推敲本」、「清書本」）が更に転写されたからである。

\*（阿部秋生）青表紙本とは「藤原定家の目の前にあったある写本の一つ」を忠実に写したもので、その写本そのものは青表紙本ではない。

\*（雁註）これは卓見である。鈔本が盗まれ、30年以上も定家が所蔵していなかったこと自体、不審である。大島本青表紙がほぼ全巻揃って影印も刊行されているが、超高額で、学生、学徒など源氏学に全く寄与していない。全巻、影印また翻刻で誰でもが文面を確認できるようにならなければ、源氏学の学問は閉ざされたままである。いわゆる自筆本、明融本、尾州家河内本などと比較する必要がある。

特に最終巻の夢の浮橋、この末尾に「本に侍るめる」とあるか確認したい。もし、「本に侍るめる」とあれば、これは最善本ではない。少なくとも紫式部の原本（自筆、草稿、清書）の原文とは違っている。

6　写本（明融）

\*定家自筆本の臨模 冷泉明融（1520s−1570s） 冷泉明融（臨模本8帖）：8帖　「桐壺」「帚木」「花宴」「若菜上下」「柏木」「橋姫」「浮舟」（第二に重要）

\*冷泉明融（1520s−1570s）　父は冷泉爲和（1486-1549）、明融の兄・冷泉爲益（1516-1570）の生没からの推測 \*みょうゆう　\*\*「柏木」は3-T3、4-Mともにあり字形、字詰、行数、ミセケチなど、そのまま臨模されている。 ◯冷泉明融（1520s−1570s）　明融（みょうゆう）本、行列、字詰など、定家本を原本通り臨模した。父、兄の生没年から推測 9帖：柏林社、池田亀鑑→東海大学・桃園文庫蔵　（第23初音、欠く） 44帖：松田武夫、山岸徳平→実践女子大学

7　写本（光行・親行、河内本）

 ◯源　光行（1163-1244）　\*河内守　源 光行・親行　　（第三に重要）7.1 河内本（大島本）　1930-1931佐渡の旧家から出た→大島雅太郎（青谿書屋）、大揃い最善本→（徳川黎明会、名古屋市蓬左文庫）

7.2 河内本（大島河内本）　大島雅太郎→天理図書館 \*影印、翻刻とも良心的で、学生、学徒などにも開かれている。 河内（かわち）本は、源光行・親行二代に亘り、ひらかなで、徹底的に句点、読点を付けて、義理（筋道の意、不審な文意）を訂正した。 \*金沢文庫印など無いので、原本を臨模したと考えられている。正確な臨模であるから、原本と考えて良い。 校合するのが目的でなく、句読を切り、清濁の点を施し、仮名の本文の傍らに漢字を当て、疑わしいところに意見を傍書した。

1944山脇 毅（はたす）／源氏物語の文献學的研究。創元社

\*最初に河内本に注目した学者である。京都大学で、西村碩園、藤井乙男、新村出、吉澤義則らに学んだ。山脇氏に続き、池田利夫が影印、翻刻を刊行した。

1988池田利夫／源氏物語の文献的研究。笠間書院

影印、翻刻も刊行され、公開されている。

1977山岸徳平／尾州家河内本源氏物語開題。日本古典文学会

1977池田利夫／河内本源氏物語成立年譜攷。貴重本刊行会（日本古典文学会） \*山脇毅（はたす）、山岸徳平、池田亀鑑、稲賀敬二ら諸先学の業績に負うたと記されている。 1977-1978秋山虔、池田利夫／尾州家河内本・源氏物語　全5。武藏野書店

8　写本（雅康）（1481c） 飛鳥井雅康（1436-1509）　浮舟を欠く

 8.1 　1481c 大島河内本　佐渡貝塚・田中家（田中とみ、千利休の後裔）←長州藩毛利家←大野毛利家（吉見氏を継承）。 池田の桃園文庫→京都文化博物館

1958　小汀利得（小汀文庫）、重要文化財に指定

9　三條西実隆（1455-1537）

実隆は、当時、第一の源氏学者であった宗祇（1421-1502）、和歌の飛鳥井雅康（1436-1509）、牡丹花肖柏（1443-1527）などの業を受け八十の高齢に至るまで源氏物語の研鑽をした。実隆公記によると、二十一歳の時、初音を見たのが最初で、五十八歳まで、嘉礼として読初を続けたらしい。

1941原勝郎／東山時代に於ける一縉紳の生活

10　写本（別本） 諸氏は別本 （版本）

立圃／十帖源氏（1654）

野々口立圃（1595-1669）松永貞徳（1571-1653）門

（かほる心）すさましく中々なりとおほす事 さまさまにて 人のかく しすへたるにやと おほす

11　春正／絵入源氏物語（1654）

 \*原本に「絵入源氏物語」と刻記されていない。俗に「絵入～」 山本春正（1610-1682）　貞徳門 ◇1654s／絵入源氏物語　60巻 　　絵入源氏物語 思ひよらぬ　くまなく.おとしをき給へりしならひにとそ（細字　本に侍るイ） 1659源氏小鏡、3冊

12　季吟／湖月抄（1673）

北村季吟（1624-1705） ◇1673湖月抄（延宝1） \*春正の絵入源氏物語の本文を底本 　湖月抄 思ひよらぬ　くまなく.おとしをき給へりしならひにとぞ.（細字　本に侍めりイ）

13　一竿齋／首書源氏物語（1673）

\*かしらがき ◇1673首書\*源氏物語（寛文13）　首書源氏物語 人のかくしすへたるにやあらんと.わが御こころのおもひよらぬ　くまなく.おとしをき給へりしならひにとぞ本に侍める \*本に侍める、この語句が本文に竄入。 1688源氏物語忍草

14　Waley: The Tale of Genji（英訳）（1921-1933）

 1921-1933A. Waley：The Tale of Genji 6vols., George Allen & Unwin Ltd, London

\*Waleyは漢籍の専門家であるが、独学で日本語を学び、10年ほど掛かり、英訳（抄訳また意訳）した。この英訳により、紫式部の源氏物語は国際的に知られるようになった。但し、鈴虫の帖は訳していない。 WaleyがSchlossというユダヤ人であったからではでなく、欧米人、そして中国人にも、虫の音（ね）を楽しむという文化がなかった。雑音にしか感じない。従って、訳すことを断念したものであろう。 \*Waleyは当時、下記の書物を底本として、英訳（意訳、抄訳）した。

 \*1912池辺義象／校註・國文叢書　源氏物語上下。博文館　\*主格が表示されている。池辺義象は和歌の専門家。

 人の隠しすゑたるにやあらむと、わが御心の思ひよらぬ隈なう、おとしおき給へりしならひにとぞ。 If she was indeed living at Ono, no doubt some lover had secretly installed her there and was looking her up from time to time, just as he himself, all too infrequently, had visited her at Uji.

やはり「もとの本に書かれていた」とは英訳していない。

15　Seidensticker: The Tale of Genji, 2 vols (1976)

1976E. G. Seidensticker：The Tale of Genji 2 vols. Alfred A. Knopf, New York

 \*Seidenstickerは、下記の書籍を底本としていた。

 16.1　1969-山岸徳平／源氏物語　全5／日本古典文学大系。岩波書店

 16.2　1970-1975玉上琢弥／源氏物語評釈　全14。角川書店

 16.3　1984-阿部秋生、秋山虔、今井源衛／完訳日本の古典　源氏物語、全10。小学館

 \*その他、与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子らの現代訳も、随時、参照した。

 \*現在では最善本とされる（翻刻4）、これらは公開されていなかった。

\*アメリカ人で、上野の不忍池に住んでいて、虫の音の文化に親しんでいた。鈴虫の巻をBell Cricketとして英訳している。 しかし、「もとの本に書かれていた」とは英訳していない。

 It would seem that, as he examined the several possibilities, a suspicion crossed his mind: the memory of how he himself had behaved in earlier days made him ask whether someone might be hiding her from the world.

16　谷崎潤一郎／新々訳源氏物語（1966）

1966谷崎潤一郎（訳）新々訳源氏物語

なまじ使いをお出しになったことが恨めしく、いろいろに気をお廻しになったりしまして、誰かがあそこに匿っているのではないかなとど、御自分がかってかの山里へ、抜け目なくお隠しになって捨てておおきになりました経験から、そうも考えていらっしゃいますとやら。

 （雁註）「とぞ」、現代語訳では「とやら」。しかし「もとの本に書かれている」とは何処にもない。

 \*最善本は、1994-阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男／源氏物語　全6／新編日本古典文学全集。小学館  残念ながら、私は未だ本書を入手していない。

 何か御気付きの点があれば、御知らせ下さい。

酒井　雁高（がんこう）　学芸員　curator

 浮世絵・酒井好古堂 [HP: ukiyo-e.co.jp]

［浮世絵学］文化藝術懇話会　 浮世絵鑑定家

 100-0006東京都千代田区有楽町1-2-14

電話03-3591-4678 Fax03-3591-4678